

論文内容の要旨及びその審査結果

専攻・分野	国際コミュニケーション専攻 英語学・英語教育学分野	氏名	赤塚麻里
学位審査委員	主査 教授 廣瀬正宜 副査 教授 大岩昌子 副査 教授 佐藤一嘉 副査 関西大学 准教授 元吉忠寛		
<p>1. 論文の目的</p> <p>本論文は、日本人英語学習者が英語プロソディーの発音操作を誤りがちで、英語話者とうまくコミュニケーションができないことに鑑み、プロソディー表記法の効果の有無を明らかにし、コミュニケーションを改善するための、日本人英語学習者に最適な英語のプロソディー表記法を提案するための研究を行なったものである。</p> <p>2. 論文の構成と内容</p> <p>論文は序章のほかに8章からなる。</p> <p>序章は、本研究の目的、方法、意義、構成について述べてある。</p> <p>第1章は、言語学の観点から英語プロソディーの特性が日本語と英語の音韻構造の違いからくる日本人学習者にとっての困難な点を指摘している。第1に、英語プロソディーの特性として、英語母語話者はイントネーション句の分割、核の配置、音調の種類の3つを決定する。第2に、日英語の音韻構造の差異として、音節構造、子音連続、母音挿入があり、日本語の制約が英語の発音において阻害要因となっていることを説明している。日本語母語話者は、この言語的差異に気づかず、英語の発音として認識されるための発音操作が困難であることを示している。</p> <p>第2章は、英語教育の観点から、海外と日本における発音の教授法に関する課題を述べている。日本では分節音の発音教育に重点がおかれがちであるが、海外の発音教授法では、分節音のみではなく、ピッチ、ストレス、持続時間について重点的に行う英語プロソディー教授法や、視聴覚教授法が学習者の発音学習の効果が示され、英語プロソディーの特性を理解するための教授法が重要であることを示している。研究方法については、プロソディーの発音評価、測定方法と英語母語話者による評価の妥当性の問題を指摘した。視覚と聴覚を統合させた視聴覚教授法の発音訓練を行うことで、発音学習の効果があることを示した。</p> <p>日本人学習者は、ピッチ変化の幅が少ないこと、音調核の位置を適切に置くことができないこと、持続時間を保てないことなどが確認された。このことから、日本人学習者には英語プロソディーの変化に気づかせる視聴覚教授法の必要性が明らかになり、文字情報と音声情報のほかにプロソディー情報を視覚的に提示できるプロソディー表記法に着目した。</p> <p>第3章は、プロソディー表記法を言語教育に応用した場合、発音操作において有効であることを確認した。これまで日本人学習者に対しては英語プロソディー表記法の効果が実証的に検討されていなかったため、この研究でプロソディー表記法の効果を明らかにする必要があることを示している。そして、日本人学習者を対象とした英語プロソディーの描き取り調査を行い、発音と聴取における困難点を明らかにし、音の連続性、ピッチ変化の幅を示すことを検討した。</p> <p>第4章は、日本の英語教育の問題点を指摘している。英語教員の音韻知識と指導力の不足であることから、本研究は日本人学習者に効果のあるプロソディー表記法を明らかにすべく、プロソディーの測定方法、日本人学習者に対するプロソディー表記法の有効性、表記法によって聴取と発音の成績に関連性があるかどうかを調べ、日本の英語教育においてプロソディー表記法による発音指導法を提案することを目的としている。これらを調べるために、次章以下で予備調査1、2および本調査においてプロソディー表記法の効果を検討している。</p>			

論文内容の要旨及びその審査結果

第5章は、5種類の表記法（「ピッチレベル型」、「連続カーブ・ドット型」、「カーブ・ドット型」、「ダッシュ・ドット型」、「ドット型」）の違いを検討するために、予備調査を2回行い、予備調査1では事前テストと事後テストの発音成績変化量から表記法の違いを検討した。予備調査2では、調査語を統制し、分散分析の結果、「連続カーブ・ドット型」と「ダッシュ・ドット型」の表記法がよいことを明らかにした。ここで、よい結果を得たこれら2型に、予備調査1でよかった「ドット型」を加えた3種類の表記法で本調査を行うことにした。

本調査を行うにあたり、予備調査1と2で行った文単位のプロソディーの発音操作の分析方法の改善点を4つ挙げている。

- 1) 文単位における音調核のプロソディーの操作は、プロソディー表記法以外の要因が影響していると考えられるので、本調査では一語文で実施する。
- 2) 測定方法において、プロソディーの要因を統制して行う。
- 3) 音調の種類に、上昇調を含めて検討する。
- 4) プロソディー表記法の効果を検討する際に統制群を入れる。

第6章では、英語プロソディー表記法の効果を明らかにすることを目的に行った本調査について記述している。文単位のプロソディーの発音操作以前に単語で操作できる必要があるため、プロソディーのわかりやすい一語文を検討した。英語の発音として認識されるためのピッチ、ストレス、持続時間の条件を統制して本調査を行った。ピッチは、下降調、上昇調、下降上昇調の3種類に統制し、ストレスは、音節数を1音節から3音節までパターンを統制し、持続時間は1,000msに統制した。英語プロソディーの発音と聴取テストを作成し、測定法を設定した。本調査の仮説とテストは以下の通りである。

- 1) 仮説1「英語プロソディーの発音操作においてプロソディー表記法は効果がある」を検討するために、発音テストと聴取テストについて事前テストと事後テストを行った。このテストの目的は、教授法の違いがスピーキングに関する能力に与える影響を検討することである。プロソディー表記法のセッションを開始する前に、発音に関する能力にクラス間の偏りがないことを確認するためのリスニングテストを行った。
- 2) 仮説2「プロソディーの聴取と発音は関連している」を検討するために、発音テストと聴取テストにおける事前テストと事後テストの得点の変化を検討した。このテストは知覚と産出の観点から発音と聴取に関する能力の関連を検討することを目的に行った。このため、事前テストと事後テストの結果を用いて相関を検討した。

調査の結果、「連続カーブ・ドット型」の表記法が他の表記法2つ「ドット・ダッシュ型」と「ドット型」と統制群に比べて有意に得点が高く、よい結果をもたらした。一方、プロソディーの聴取テストと発音テストについては、それぞれ事前テストと事後テストの間に正の相関が示されたが、プロソディーの聴取テストと発音テストには相関が示されなかった。

第7章は、全体的な考察で、日本人学習者にはプロソディーの発音操作においてプロソディーの表記法の提示、特に「連続カーブ・ドット型」の表記法の提示が効果的であることが明らかになったこと、聴取テストと発音テストの相関については長期的に検討する必要があることなどを挙げている。

英語プロソディーの発音操作ができることにより、日本人学習者が英語の音韻構造と音声的特徴をとらえることが見いだせたことは、言語学と英語教育において意義があると考えられる。

本研究により、これまで英語教員や教科書作成者が主観的判断から示されてきた表記法について、学習者の視点から実証的に検討した、学習効果のあるプロソディー表記法が実践的な発音指導に応用でき、発音教材の作成にも貢献すると考えられる。そして、プロソディー表記法を使った発音教育によって日本人英語学習者のコミュニケーション能力の改善がはかれると期待できる。

第8章は、プロソディー表記法を発音教育に応用するための発音教材の作成、発音学習の定着の課題、文レベルの応用、質問紙の作成について述べており、今後の英語プロソディー研究の課題として、日本人学習者の発音学習の意識、学習ストラテジー、教員の発音指導に対する意識などの要因をプロソディー表記法と組み合わせた研究モデルを構築して総合的に研究することを課題として挙げている。

論文内容の要旨及びその審査結果

3. 論文審査の結果

本研究によって、日本人学習者の発音学習に有効なプロソディーの表記法が明らかにされた。論文には誤植が散見されたが、論文内容は日本における従来の英語教育に不足していた英語プロソディーの学習について、その表記法と学習との関連を実験を通して明らかにしたもので、今後の日本における英語教育に英語プロソディーを加えることにより英語話者とのコミュニケーションがスムーズにいくように指導する基盤となり、英語教材の改善とともに、現職の英語教員にとっても英語プロソディーに目を向けさせることになる。今後の日本における英語教育に取り入れられる可能性を大いに有するオリジナルな研究である。

本委員会は本申請論文を博士学位論文としての水準に十分達していると認めることで一致した。

以上